

第 5 章

結論

第5章 結論

5-1 総括

ここでは本研究で得られた結果についてまとめる。

(1) 日常のガートとモハッラの関係性

日常の河岸空間〈ガート〉と周辺コミュニティ〈モハッラ〉の関係性については、ガートの持つ性格によって、人々がとる行動に対して与える影響が違う。つまり「ローカル」―「タイト」なガートは地元住民（周辺モハッラ）に対してある程度帰属していることがわかる。逆に「アンローカル」―「ルーズ」なガートでは誰もが非常に高い“徳”を受けられるために、地元住民のみならず、多くの巡礼者、観光客が訪れる。このようなガートでは、ガートを使用する住民の、ガートへの物理的な距離を越えた関係性がみられる。

一方で、いま述べたような関係性には個人対ガートの関係しか成り立ってはならず、ガートは住民によって使い分けられた状態だといえる。この意味では、常にガート、河川に対応したコミュニティでのアイデンティティや、環境との関係性に特別なものは見受けられない。

(2) Dev Diwali 祭の「伝統的仕掛け」

Dev Diwali 祭ではサミティという自治組織によって、「伝統的仕掛け」が仕掛けられることで、人々は共通の行為を行い、共通のコスモロジーを感じ取っている。飾り付け、ランプの点火というようにイベントが進行し、聖地ヴァラナシの象徴であるガートが何万というオイルランプに覆われる姿が、住民にとっては「ヴァラナシの住民」というアイデンティティを確認する瞬間に他ならない。これには一方で、観光客や巡礼者といった外部者によって「見られる」という意識に起因していると考えられ、「伝統的仕掛け」とは、主に現象によって統一感を演出するものであるといえる。そしてそれがヴァラナシの持つコスモロジーやスピリチュアルなものを利用し、ガンジス川へ人々が帰依するという伝統的な構造をもつ祭として、人々の眼には映るのである。

(3) Dev Diwali 祭の「現代的仕掛け」

Dev Diwali 祭は「伝統的仕掛け」における現象による統一感に加え、「現代的仕掛け」による、祭における意味付けの拡張が重要な祭の成立要素となっている。

「現代的仕掛け」では、「ガートを美しく」といったそれまでの伝統的な祭には存在しえなかったガンジス川の汚染に対する危惧に起因する「環境美化」のコンセプトを、Dev Diwali 祭の開催することによって住民の意識に芽生えさせている。「伝統的仕掛け」によって「見られる」という意識と共に、飾り付けを行う住民にとっては、ガートを清掃し、美しく「見せる」という視線の内部化が行われる。つまり、ヴァラナシの飾り付けを行って

いる住民にとっては、観光客や巡礼者など外部者がみる Dev Diwali 祭の現象的統一感に加え、多くの人々が訪れるガートやガンジス川を自分達が「美しくする」という意識化での統一がもたらされている。

(4) Dev Diwali 祭の有機的構造

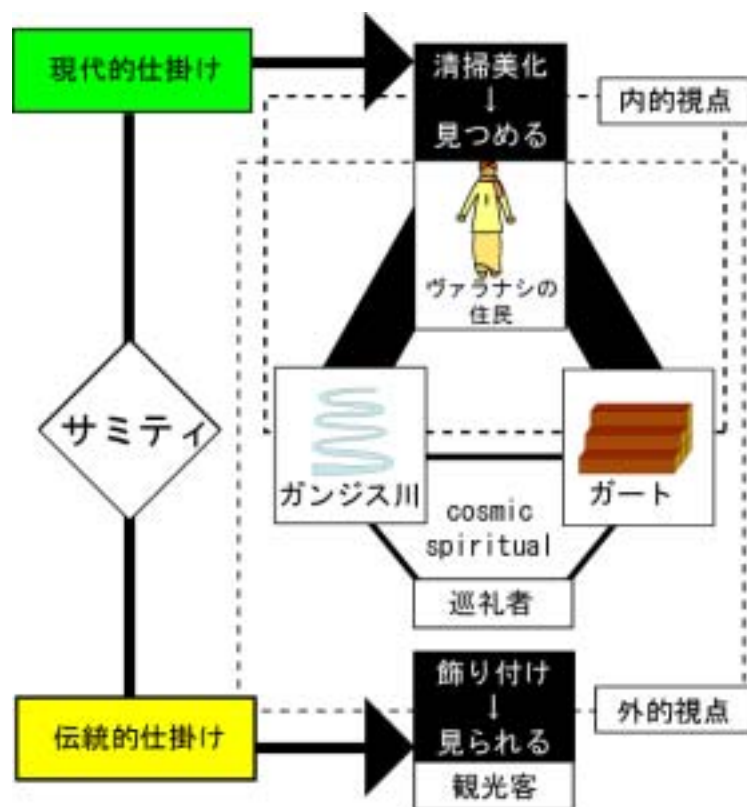


図 5-1 Dev Diwali 祭の構図

4 章のはじめに述べたように、Dev Diwali 祭は十数年程度の歴史しか持たない、ヴァラナシの歴史の中では非常に若い祭である。「伝統的仕掛け」とはオイルランプによってヴァラナシがもつ聖地性を巧みに、祭のなかに導入して、「ガート」と「モハッラ」の関係性を結び付ける。そして、「現代的仕掛け」によって環境美化というコンセプトを新たに導入することにより、その関係性はより強固なものになるのである（図 5-1）。

この祭が、現在、ヴァラナシを代表する祭となりえた理由は、

- ① サミティという地元住民が構成する自治組織が運営するというソフトウェアの存在
 - ② 有機的に機能しうる二つの「仕掛け」を有している
- という二点としてまとめることができる。

5-2 展望

ヴァラナシにおける Dev Diwali 祭を対象とし、河岸空間と周辺コミュニティの関係性について本研究では、5-1 に述べたような知見が得られた。それらを踏まえ今後の展望について述べる。

(1) 形態合理主義に向けて

Dev Diwali 祭はサミティという、住民による自治組織が組織だって運営することによって成功を収めている祭だということができる。住民がヴァラナシという都市の持つ特質を理解し、巧みに Dev Diwali 祭に取り入れることによって、住民達は自分達の都市で起きている問題点、そして役割を発見していた。そして飾り付けによる視点の外部化と共に、結果として「街をきれいに」という環境美化という、視点の内部化が新しい目標を見つけて出すことに繋がったのである。

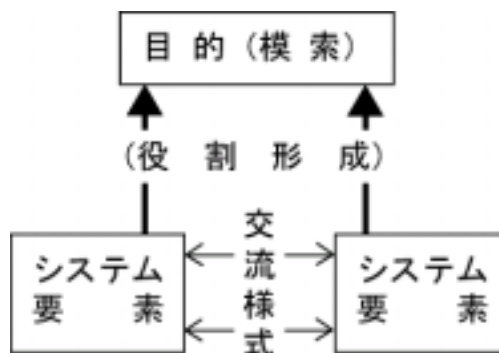
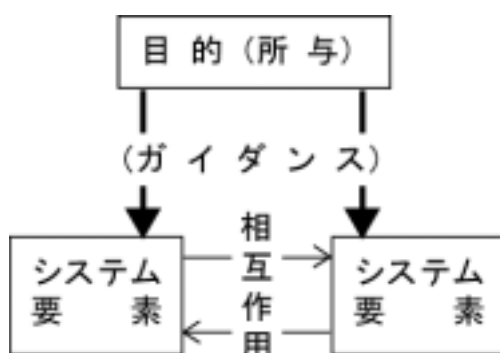


図5-2 目的合理主義のシステム（他律型） 図5-3 形態合理主義のシステム（自律型）

しかし、昨今、行われるまちづくりのための「お祭り」や「イベント」では、そのプロセスとして本来、重要となるはずのコミュニケーションが不足し、往々にして top-down 型（図5-2）と呼べるようなシステムであるがため、外的視点にとどまった他律的なシステムとなっていた。

一方、祭を行うプロセスの中に、十分な住民によるコミュニケーションによって、外的視点に内的視点をもたらす効果のある構造をもつ Dev Diwali 祭は、「環境システムと社会システムとの融合的構成を設定し、各サブシステム内に含まれる人間と環境の交流関係を定率すること」¹⁾の重要性を指摘した末石によって示された図5-3²⁾によっても説明がつく。まさにこの図はサミティによって、ガートとモハッラの組み合わせを bottom-up 型の会議によって決定し、住民が意識するようになった「環境美化」への眼差しを共有しようと試みているシステムと合致するといえる。

つまり、Dev Diwali 祭とは、今後のまちづくりや地域おこしにおいて、形態合理主義へ向けた一つの形を示めている。

(2) まちづくりイベントの仕掛け

ヴァラナシのように聖地性が非常に高く、常に宗教的な祭りのみが行われている都市においても、「環境美化」という新たなコンセプトが付け加えられた「まちづくり」のための「お祭り」が創造された。

近年、日本では「まちづくり」、「町おこし」といった運動（地域の活性化＝地域おこし）に関連して行われるイベント＝「お祭り」が多く行われている。これらの「お祭り」は主に神なき祭であるにもかかわらず、地域的なアイデンティティの形成・維持を理念として据えているものが多い。しかしながら、「お祭り」が人を呼び寄せることのできる「資本主義の商品」³⁾になるかどうかという選択を迫られ、本来、地域住民のための「祭り」が外部者のための「お祭り」になっている。このような状況下では、結局のところ主催者や行事参加者の判断と観客動員数など「参加する、見物する、情報として知る」といったも表面的変化による評価が行われる。このことだけでは「住民が地域への愛着や帰属意識を育む」⁴⁾といった地元住民が主体となるべき「お祭り」本来の目的を達成することは難しいといえる。つまり「お祭り」が住民に定着し、地域の象徴となるための仕掛けが先ずは必要となるのである。

このことに対し、Dev Diwali 祭の中に見られた「二つの仕掛け」を当てはめてみる。多くの観光客を集め、「お祭り」を「資本主義の商品」足らしめるものが、「見られる」という外部者的視点である「伝統的仕掛け」であるといえる。この仕掛けは上述した「表面的変化」を生み出す仕掛けである。例えば、近隣に存在する「文化資源」を利用し、新たな文化を創造するのである。しかし、これはあくまで「表面的変化」に過ぎず、十分とはいえない。これが多くのイベントに見られる現状であろう。

そこで、今後は住民の意識を内部化する「現代的仕掛け」がコミュニティの結束や、愛着を促がすために必要となり、「イベント」を定着させるためにも、非常に有効な仕掛けとなりえると考えられる。

第 5 章 引用文献

- 1) 末石富太郎+環境計画計画会：環境計画論，p203，森北出版株式会社（1993）
- 2) 末石富太郎：環境学ノート，p71，世界書院（2001）
- 3) 小松和彦編：現代世相 5 祭りとイベント，p37，小学館（1997）
- 4) 小松：前掲書，p32